



日本画家

平良志季



日本の伝統的な思想と
文化に根付く
“妖怪”を描き出す



八百万の神、またはアニミズム。日本では「自然や様々な生き物の中に、靈魂や神が宿っている」という思想が、古くから根付いている。妖怪もこれらの考えから生まれた存在のひとつであり、特に江戸時代には鳥山石燕をはじめ河鍋暁斎、葛飾北斎など浮世絵師たちの題材として多く描かれてきた。多種多様な妖怪文化が開いた日本。現代でも漫画や小説、絵画などに登場し、身近な存在として親しまれている。昔も今も、人間は妖怪という自分とは異なる存在

に、不思議な魅力を感じているのだろう。

平良志季は、古来から続く日本の様々な文化をテーマに制作する日本画家である。ここでは彼女が描く「妖怪」にスポットを当てて掘り下げてみたい。

平良がモデルにしているのは一つ目小僧。彼らは人間に悪さをしない。どこか可愛らしく、なぜか憎めない、生き生きとしたその姿は、まるで人間のよう。に表情も性格も千差万別。平良が描き出す、そんな愛らしい妖怪たちと戯れてみよう。